

世の中には、経営者に関する教えが数多くあります。私たちの学ぶ倫理では、人としての「もの見方・考え方」を学び、そして実践しています。

その中の一つに、「人を改めさせよう、変えようとする前に、まず自ら改め、自分が変わればよい」という項目があります。

例えば、社員がお客様とトラブルを起こしたとします。その場合、社員を教育・指導し、再発防止に努めるのは当然であり常識ですが、倫理ではさらに一歩突っ込んで、「身の回りに起こる全責任は経営者である自分にある」と見て、自分の行ないや心を見直すきっかけとします。

ある建設会社は、住宅販売を中心に毎年売り上げを伸ばし続けている優良企業です。しかし以前は今日のような経営状態ではなく、いつ倒産するかどうかの瀬戸際に立たされていた時期がありました。

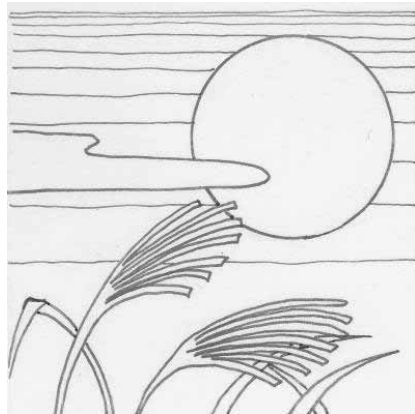
会社がガタガタしていた原因は、社長と専務の不仲にありました。父親から譲り受けた会社を、社長を兄、専務を弟が継ぎました。不仲になったきっかけは、専務である弟の酒乱でした。

初めて兄弟で酒を酌み交わした日のこと。だんだんと弟の目が据わり始めました。そして突然、社長である兄に仕事や家庭のことで愚痴を言い始めたのです。兄は適度に受け流していましたが、次第に口だけではなく手を出し始めたのです。

怒り心頭に達した兄は、家族の前で弟と大喧嘩をしました。それからというもの、親族が集まるたびに、いつも弟の酒乱で揉めることが多くなったのです。見かねた兄は再三、弟に酒を止めるよう忠告するのですが、いつこつにその気配はありません。

ある日、取引先との宴席があり、兄は弟に代理として出席させました。その翌日、取引先の社長から

## 事象を素直に受け 未来を変えていく



絵・今谷 鉄柱

強い怒りの電話がかかってきました。宴席で弟が社長に絡み、大喧嘩になったといつのです。兄はすぐに弟を呼び出して取引先にお詫びに行きましたが、先方の社長は腹の虫が収まらず、結局、以後の取引は解消となってしまったのです。

会社にとっては大口の取引先であったため、それ以来、兄は弟を責め続け、兄弟の仲はさらに悪くなり、社内で口もきかなくなっていました。

そんな中、兄が出席した宴席で、弟と同じように酒乱の人が仕事上のことで絡んできたのです。なんとか我慢はしつつも怒りが収まらずにいたところ、周囲が「あの人の家庭は複雑なんだよ。あの人も被害者だから許してほしい」といのです。

その瞬間、兄は弟のことを思い出しました。実は祖父・叔父と酒癖が悪く、代々にわたり酒乱が出ている家系だったのです。

「弟は家系という流れの中で、負の遺産を引き継いでいたんだ。もちろん弟は好きで引き継いだわけではない」と気づいた兄は、すぐさま弟に詫言を入れ、責め心を持って自分の考えを改めたのです。

その後、弟は不思議なことに、どんなに酒を飲んでも愚痴を言わなくなり、暴力も振るわなくなったのです。それどころか、社長である兄を慕い、仕事も率先してこなすようになり、現在の繁栄を築く原動力となったのです。

「他人と過去は変えられないが、自分と未来は変えられる」という言葉があります。身の回りに起こることを自身の成長の糧として捉えた時、人生観は大きく変化します。

あれが悪い、これが悪いと人を責める気持を捨て、身の回りに起こることをすべてに感謝の心を持って自分を変えていく努力をしていきたいものです。